

月刊

みんな
ねっと

6
2019

◆特集◆

「ひきこもり」への支援

- 家族に対する支援(美濃屋裕子) ● 在宅精神科医療の立場から(飯田 茂)
- 手引きに示されているヒント(宮坂 勇)

■ みんなねっと相談室から(第3回)「親なき後の不安をどうしたらいいですか？」

■ 家族が家族に伝える教育プログラム「家族学習会のススメ」 ③グループワークを学ぶ

■ 知ることは生きること(青木聖久)連載 42回《自らの人生の主人公としての家族の暮らし特集①》
妹という立場が引き寄せた公認会計士・税理士・精神保健福祉士としての私の自己実現



みんなのわ—読者のページ 2

特集 「ひきこもり」への支援

- 家族に対する支援 (美濃屋裕子) 6
在宅精神科医療の立場から (飯田 茂) 8
手引きに示されているヒント (宮坂 勇) 11

多事彩々 人の値打ち(野村忠良) 14

みんなねっと相談室から 《第3回》 親なき後の不安をどうしたらいいですか…? 16

家族が家族に伝える教育プログラム 「家族学習会のススメ」 (③グループワークを学ぶ) 18

街の診療所からのお便り【連載 145】(増本茂樹)

…役に立つ援助をするために 家族と医療との相談が必要です… 20

ダイアログ🗨️つながろう ダイアログ🗨️つながろう～日本各地でのさまざまな取り組み～

(第3回) オープンダイアログって何だろう? (～チームふぁんだるまの場合～) 24

知ることは生きること (連載42回) 妹という立場が引き寄せた公認会計士・税理士・精神保健福祉士としての私の自己実現 《自らの人生の主人公としての家族の暮らし特集②》 (青木聖久) 28

ワタシ。統合失調症なん德斯。小田島六軒【第3回】 34

お知らせします みんなねっとの活動 36

感想・意見・投稿を募集しています

メールでの原稿募集を始めました。
アドレス：minnanet.seishinhoken@outlook.jp
・「みんなのわ」コーナー(300～350字程度)
・「地域の話題」コーナーへ皆様の原稿をお寄せ下さい!(1000～1200字程度)

家族に対する支援

任意団体サブリング代表
スクールソーシャルワーカー 美濃屋裕子

ひきこもり評価・支援ガイドラインには、当事者支援はもちろんのこと、家族（を含めた環境）に対する支援の重要さが示され、親が自信と誇りを持って本人を支援できるように、親自身の自責感や無力感を払拭して、力を引き出していく必要性と、「親原因論」は有害無利益であることがはっきりと述べられている。

しかし私達支援者は、はつき

りと明言はしないものの、「親が原因」といった考えをもって家族に接していないだろうか。この点について、ひきこもり本人による家庭内暴力がある場合を例示して論じたい。

親の傷つきへの鈍さ

支援者には、子からの暴力に對する家族の被害に對して、鈍さがあるように思う。支援者が、家庭内暴力を受けている家

族に對して支援の早期段階において「家族の言動が暴力を誘発している」「暴力は本人のSOS」等と伝えることがしばしばある。確かに、家庭内暴力にそのような側面はある。しかし、配偶者による家庭内暴力の被害者に對して、このような説明がなされることはきわめて少ない。暴力を受けることが被害者にもたらす様々な重篤な影響について知見があり、被害者に對



してこのような話をする事で生じる二次被害のリスクを懸念するからである。子の家庭内暴力においては、被害者である親に對するこういった配慮が欠如していることが多い。それは支援者側に、意識的・無意識的に存在する「親が原因である」という考えが影響しているのではないだろうか。

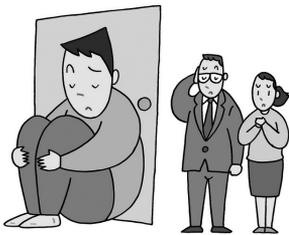
家庭内暴力の有無に関わらず、こうした支援者の考えを、直接的な言葉にしなくとも、親は感じ取り、ますます自信を失っていく。暴力を受け続けて自尊心が著しく低下し、情緒が不安定な場合はより顕著である。そして家族支援からドロップアウトしていく。親による本

人の理解や現状の把握は不可欠であるが、それができる余裕を生むまでには、親自身が安心してき自信を取り戻せるよう、丁寧に根気強く親の痛みに寄り添い、一人の人間として尊重することが求められる。支援者は自分自身の価値観に自覚的になり、本当に家族に寄り添った支援ができているか、自らの言動を省みることが必要である。

自責感につぶされた親のいきつく先は

昨年末、ひきこもり自立支援団体の施設から、入所者10名が脱走し、福祉施設に保護された、というニュースが報道された。この件に限らず、ひきこもりを

自宅から連れ出し、施設へ半ば強制的に入所させる「引き出し業者」の問題は以前より議論されてきた。多くの支援者は、ひきこもり本人の人権侵害を伴う支援に對して否定的であり、私もその一人である。一方で、支援者によって無力感に陥られた親達が、自分たちで支えることを諦め、引き出し業者を頼っているケースが少なからずあることを、自戒をもって受け止めたい。



特集「ひきこもり」への支援

在宅精神科医療の立場から

医療法人社団心翠会 理事長
登戸診療所 院長 飯田 茂

「様々な要因の結果で社会参加を回避し、原則的には6か月以上にわたって家庭にとどまり続けた状態」をひきこもりと定義する。自宅以外での社会生活の場が長期にわたって失われるために当事者に様々な不利益が生じる。

私たち心翠会は、精神科医と精神保健福祉士を中心に内科医、看護師、作業療法士など多職種が連携し訪問診療（往診）

と精神科訪問看護をおこなってきた。その中で外来通院が困難である理由が「ひきこもり状態」である方々がいる。統合失調症、うつ病などあきらかな精神疾患が背景にあり、ひきこもり状態となつている方々がおりに治療の対象となつているが、心理的なメカニズムによりひきこもりとなるケースもある。

*

Aさんは大学院卒業後、父親



が癌になり母と共に看護をしていた。父の病状が常に気になり病状が変化した際に外出していることにより対応が遅れることに不安を感じていた。その結果自宅からほとんど出ない状態が

手引きに示されているヒント

特定非営利活動法人このは 宮坂 勇

「ひきこもり」とはいったい何なのでしょう。家に居続ける状態、自室にこもっている状態、と想像したり、何かの理由で通う場をなくし次のステップへの行動がとれない状態と考えたりするかもしれません。

国は、過去にいくつかの関連する研究を進めており、その結果から様々な施策や事業が行われています。今、改めて「ひきこもり」への支援ガイドライン

を確認しながら、ちりばめられたヒントを拾い上げ、本人、家族、支援者の共通の理解を進め、現に悩んでいる方の一助になればと思います。

ひきこもりの評価・支援に関するガイドラインによる定義

このガイドラインは現在の「ひきこもり」支援を進める上での手引きとして様々なところで利用され、ひきこもりを以下

のように定義しています

「様々な要因の結果として社会参加を回避し、原則的には6か月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を指す現象概念である。なおひきこもりは原則として統合失調症の陽性あるいは陰性症状に基づくひきこもりとは一線を画した非精神病性の現象とするが、実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性は低いことに留意すべきである」

定義を読み解くと、まず、ひきこもりとは現象であるということ。これは簡単な言葉ですが大きな意味を持ちます。支援者はひきこもり現象を起している根っこの部分にある



人の値打ち

宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩に「ミンナニデクノボートヨバレ」という表現があり、最後に「サウイフモノニワタシハナリタイ」とある。この願いに、若い頃から筆者は大いに共感を覚えてきたが、素直に実践することの難しさも感じている。

もともと、筆者の社会的地位は低く、学歴もたいしたことはない。いつもつましく暮らし、子どものように無邪気に行っているのが好きなので、デクノボーと呼ばれても一向にかまわないはずなのに……みんなに軽くみられると、少し寂しい気持ちになる。

地位は低く貧しくても、せめて心だけは豊かでありたいと思い、仏教を学んだこともある。紀元前、インドに仏教が生まれたころ、出家した者は乞食の姿で修行していた。どんなに深い悟りを得ても、粗末な僧衣姿で乞食の旅をする。禅宗の極意では悟り臭いのは興ざめで、さりげなく何も知らない人のようにしているのが良いという。

「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という諺もある。自分には誇れる

《第3回》親なき後の不安を どうしたらいいですか…？

みんなねっと 相談室から



◆相談内容

今は両親と暮らしているの
当事者の生活も何とかなって
いますが、親が亡くなった後に
当事者がどのように生活できる
のでしょうか…親も高齢になり、
今のままではいけないとは思
いますが、何からやればいいの
わからなくて困っています、と
いう問い合わせや相談は、70代
以降の親御さんから多く寄せら
れています。また、全国の親の立



場にあたる家族の方々にとつ
ても、共通の大きなテーマにな
っているのではないでしょう
か。

◆相談員の対応

現実問題としてどう考え対
峙したらいいのでしょうか。今、
親なき後の対応を何もしなけ
れば、残された兄弟姉妹等に大
きな負担として引き継がれるこ
ともなります。親からは何も聞
かされていなかったのに、親が
亡くなって何もわからない、ど
うしたらいいか…と大変に困惑
した兄弟姉妹から相談が入るこ
とは少なくありません。

そのような負の引き継ぎは、
兄弟姉妹にとつてはもちろん、
当事者にとつても負担になり、

家族が家族に伝える教育プログラム

家族学習会のススメ

③グループワークを学ぶ

家族による家族学習会は一つのテーブルを囲んで体験を語り合うプログラムです。その中で、私たちはグループでの話し合いのしかたを学びます。

それまでの私は、話し合いの場で進行役の方にすべてを任せてしまい、口を挟まないことが身についてしまっていました。

家族学習会は、担当者数名と参加者数名、全部で10数名で語り合いますが、会を催す側の担

当者全員でその場を作っていきます。進行役が一人で進めるのではなく、担当者はみなで声を出して関わっていきます。

その日の担当者の進行役個人の負担にならないようにして、そこにいる全員が対等に語り合っていけるようにこころ配りしながら進めていきます。

参加者の中には話したそうにしている方、また、なかなか発言できないでいる方がいらっ

しいやいます。そんなとき、参加者それぞれの心の奥にある苦労話を引き出せるように工夫をしながら担当者は声をかけます。充分にこころの内を吐露していただけることをめざして、語りあいの場を作っていきます。

私は家族学習会で培ったこのグループワークを、知らず知らずのうちに我が家の茶の間でも実践していました。当事者本人も含めた家族みなが、自分の話をなんでも安心して話す場になっけていきました。

こだわりの話でも妄想の話でも、なんでもそこでは話題になります。自分の気持ちを言葉にできると、自分自身が整理されていくようです。

街の
診療所から
の便利

…役に立つ援助をするために
家族と医療との相談が必要です。…



連載
145
回

ましもと しげき
増本 茂樹
増本クリニック院長

〈駆け込んできた患者〉

この日は夜の7時から介護保険の審査会の予定がありました。が、午後の診療は順調に進み、もう少しで仕事が終わる5時50分ころ、駆け込んできた30代の女性がありました。彼女は切羽詰まった様子で、「隣の県に住む妹が精神的に不調なので、その隣の県に住んでいる姉の私が車に乗せて親元に連れ帰り、私

はまた自宅に帰るので、今日の薬を何とかしてくれ」と言われます。

この地域は精神科救急施設があるような都会ではありませんから、私は断ることもできません。で、先の見通しのないまま妹のWさん30歳女性と会うことになりました。

〈犯罪の被害者〉

Wさんは、お姉さんに抱き抱

えられて入って来ました。その後を彼女の2人の子供を連れたいおばあちゃんが追って来ます。

Wさんは、心ここに在らずの表情で茫然としておられ、精神科医は重症の精神病状態を感じます。どんな気持ちなのか聞きませんが、返事はしないで大きな息を繰り返し、お姉さんに寄りかかっていきます。こんな様子で数時間も高速道路を走って来るのは大変でしたね。

ダイアログでつながろう ダイアログにつながる

～日本各地でのさまざまな取り組み

オープンダイアログって何だろう

～チームふぁんだるまの場合～

《第3回》訪問看護ステーションふぁん 吉澤美樹



事務所屋上にて～左から関口・宮崎・吉澤・西村・大島・戸塚

事が目的でないの
で、思いがけないと
ころに楽になる方
法が見つかること
がある。結果的に楽
になったと感じる
事が多い不思議な
感じ。言葉のやり
取りには『情報を伝
えるやりとり』と『気

私たちは、「訪問看護ステーションふぁん」と「だるまさんクリニック」が手を取り合い「チームふぁんだるま」として訪問にて対話が続いています。オープンダイアログ(以下OD)に強い魅力を感じ、日々の実践にODを取り入りたいと試行錯誤しているチームです。当チームは多職種6名で構成され、職種にとらわれることなく、それぞれ

の違った強
みを活かし

た対話に取り組んでいます。改めて、6名(自分を含む)に「ODの魅力とは？」と問いかけてみたところ以下のような応答がありました(本人の表現のまま記載)。

「対話の場では等しく参加者の意見が大事にされていること。正しいか誤りに決着をつける

持ちや感情を伝えるやりとり」と
があると思っていて、後者は言語
化することが非常に難しいし、普
段の生活からそついった事に慣
れていない。ODではそついつ
た『気持ちや感情を伝えるやりと
り』が飛び交っている。(関口)」
「看護師としての専門性だけ
でなくひとりの人間として向き

知ることは生きること

連載42回

妹という立場が引き寄せた公認会計士・税理士・精神保健福祉士としての私の自己実現
(自らの人生の主人公としての家族の暮らし特集②)

日本福祉大学
みんなねっと理事
青木聖久

今回ご紹介するのは、森田ゆうさん(仮名、50歳代、女性)です。3年ほど前から森田さんは、大学のスクーリング、みんなねっと大会の分科会、さらには、講演会等によく来てくれています。しかも、席は決まって前の方。

兄弟姉妹の立場であると共に公認会計士

話を聞くと、精神障がいのあるお兄さんがいると共に、森田さんの職業は公認会計士。加えて、大学で社会人学生として社会福祉を勉強しており、私と同年代。

ちなみに公認会計士の代表的な仕事は、財務諸表監査。それは、企業が経営状態等を適正に表示しているかを、第三者的立場で

判断し、監査報告書にまとめる、というもの。そのことから、公認会計士は「市場の番人」とも呼ばれるのです。

同じ時代を生きてきた人が、どのような歩みを経て、今に至っているのか。今月号では、森田さんの歴史に迫ってみたいと思います。

ませていた

森田さんは、中学校の教員をしていた父親と、銀行勤めをしていた母親の元、3人きょうだい(10歳年上の長兄、5歳年上の次兄)の末っ子として生まれました。父方、母方のいとこの中でも一番年下で、周囲から可愛がられて育ったそうです。

その一方、周囲を客観的に捉

ワタシ。 統合失調症 なんデス。

小田島六軒

第3回

これから
3回にわたって
病気がヒドかった
頃のお話を
お届けします♡

始まりは
突然でした。

このごろ
ずっと
家にいる
だつてさ

アイツ
小田島
じゃね？

それは駅前の本屋
さんでした。

誰だろ？
私のコト
言ってた…

2F
キョロキョロ

アレ？
誰れもないな…

…？
なんだろう

それは
幻聴
だったので
す。

幻聴は
だんだん
ヒドくなつて
いきま
した。

ビヨーキ
なのかしら
コワイわねえ…！

あのウチの子さ、
仕事もしないで
ずっとウチに
とじこもつて
んだって！

うるさい！！